

音声常同行動への反応妨害・誘導法（RIRD）

2022. 7. 10 福岡定例会

○「反応妨害・誘導法」（response interruption and redirection, RIRD）とは

反復常同行動や自傷行為などに使われる。

これらの問題行動が起こったら、直ちに指示やその他の気をそらすものを提示して、問題行動を中断させ、より適切な反応へと誘導する。

2007年、Ahearnらによって、はじめて音声常同行動に用いられた。

2018年のレビューによると、2000～2016年の間に10の研究があり、いずれもよい結果を出している。

考え方としては、問題行動と同時にできない適切な行動を引き出し、それを強化することによって問題行動を減らす、一種のDRI（対立行動分化強化）か？

○音声常同行動へのRIRD

- ・音声常同行動（文脈と関係のない発声や発語）が生じたら、
- ・なるべく速やかに、
- ・子どもが成功しやすい音声表出課題（「これ何？」など）を出す。
- ・適切に答えたら強化する。

・RIRDは、ある程度の言語スキルがあり、いくつかの音声表出課題に正しく反応できる子どもに最も有効である。」

<論文紹介>

Meany-Daboul, Roscou, Bourret & Ahearn, A comparison of momentary time sampling and partial-interval recording for evaluating functional relations, JABA, 2007, 40, 501-514.

（1）対象児と問題行動

エイミー、7才。音声常同行動（vocal stereotypy）

意味のない発声と、単語らしきもの

ダニエル、21才。音声常同行動

文脈に合わない単語やフレーズ

ベス、14才。動作常同行動（motor stereotypy）

身体ゆすり、手たたき、ジャンプ、特定の姿勢を取る

（2）介入手続

○反応妨害・誘導法（RIRD）を用いた。

常同行動を始めたら、ただちに指示を出して、音声表出課題か、動作課題をさせる。

音声常同行動 → プロンプトして目合わせしたうえで、音声表出課題をさせる。

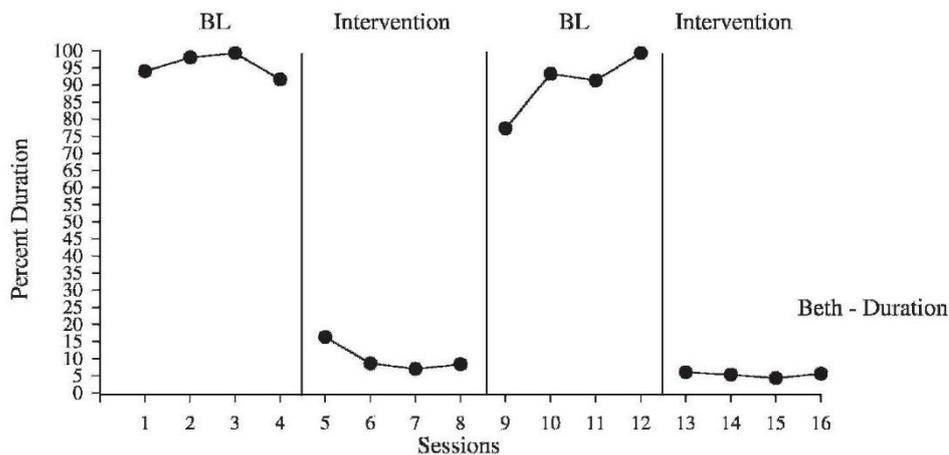
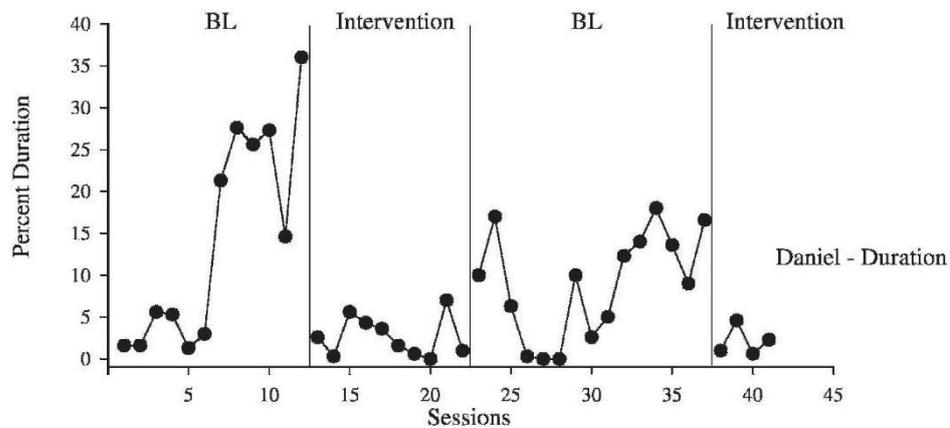
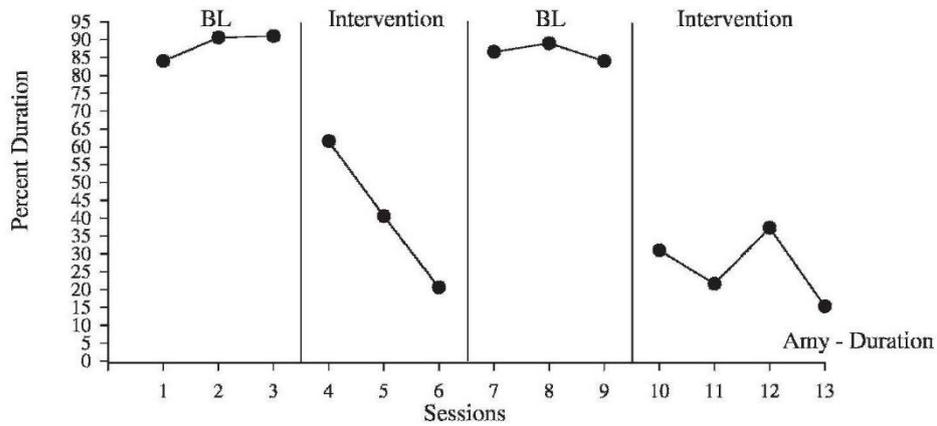
例：「このテーブルは何色？」

動作常同行動 → 目合わせさせて、適当な動作課題をさせる。

例：「鼻に触って」「頭に触って」

適切な反応は強化する。

(3) 結果



<付録：自傷行為に対する NCR（非随伴強化）の効果>

同じ論文から、

NCR(非随伴強化)とは

問題行動の有無に関わらず、一定間隔、あるいは不定期的間隔で強化を与えること。

それによって強化子が飽和化し、問題行動を起こすモチベーションが低くなることを狙う。

NCE（非随伴逃避）とは

問題行動が、嫌な事態からの逃避によって強化されている場合に、問題行動とは無関係のタイミングで頻繁に逃避させることで、問題行動を起こすモチベーションを下げる方法。

(1) 被験児

ジャック、8才、頭をたたく、頭をぶつける、自分を噛む。

機能分析の結果、課題からの逃避が強化子であることがわかった。

(2) 手続き

①ベースライン (BL)

「非随伴逃避+問題行動強化」

ジャックにたくさんの要求を出し、15秒間隔で、15秒の休憩を与える。一方、ジャックが自傷行為を行なったら、15秒経っていなくても直ちに15秒の休憩を与える。

②介入

「非随伴逃避+消去」

ジャックにたくさんの要求を出し、15秒間隔で、15秒の休憩を与える。しかし途中でジャックが自傷行為をしても、そのタイミングでは休憩は与えない。

(3) 結果

